

将来の生き方についての意識調査 — 教育環境アセスメントに関する研究第9報告 —

金 平 文 二*・岩 井 絹 江**

(平成2年9月29日受理)

An Opinion Survey on Future Life Styles A Study to Assess the Educational Environment

Bunji KANEHIRA and Kinue IWAI

(Received September 29, 1990)

は じ め に

わが国の人口の年齢別構成において、高齢者層の増大はいまや必至とされているが、このような社会の到来に対して、それぞれの世代は将来の生き方に関してさまざまな意識をもっていると思われる。今回の調査は、現在青年層にある人々、および中高年層にある人々を対象として、高齢化社会についての意識・態度・行動の実態について把握するとともに、青年層-中高年層間にどのような考え方の差異がみられるかを見出して、高齢化社会への対応のあり方について何らかの示唆を得ようとしたものである。

I 研究の目的

今回の研究では、最近の女子学生が高齢化社会の到来に対して、どのような対応のしかたをしようとしているかを把握すると同時に、中高年層にある人々がどのような生き方をしようとしているかを調査することによって、両者間の比較をしながら、高齢化社会を迎えるにあたって、どのような生き方をすることがのぞましいか、その適切な人生設計のための指針を得ようとするものである。

II 研究の方法

研究の方法として、質問紙法による意識調査によって、データの収集、分析を行うことにした。

1. 調査対象

今回の調査はパイロット・スタディであるため、短大2年の学生152名およびその学生の父母75名を調査対象とした。

*児童学科 ** 学生部

2. 調査の実施期日

平成2年7月7日～7月14日の期間に調査を実施し、調査対象者に調査の主旨を説明し、調査票の配布をし、回答カードの回収を行った。父母に対しては調査対象の学生より説明を行わせ、回答カードの回収を行わせた。

3. 調査票の設計

調査票の質問項目の作成にあたっては、平成1年の朝日新聞記事のうち、高齢化社会に関する記事を切り抜き、それらの記事を参考として質問項目を作成した。

調査票の質問領域は次のとおりであり、多肢選択式の質問40問によって構成した。

〔質問領域〕

- i 高齢者に対するイメージ
- ii 高齢者をめぐる生活環境への期待
- iii 高齢者への介護
- iv 高齢者としての健康
- v 高齢者としての経済
- vi 高齢者としての人生設計
- vii 高齢者としての過ごし方

回答方法はコンピュータ集計のため設計した回答カードに記入させる方式とした。

4. 調査結果の集計

調査結果のデータはコンピュータ処理によって、学生グループ、父母グループ別に、各質問項目における選択肢の度数、パーセンテージの算出の単純集計といくつかの質問項目間のクロス集計を算出して図式化し、それらの結果について考察を行った。

結果については、分析対象区分別に質問項目の選択肢別のパーセンテージを比較棒グラフによって表示した。

5. 調査結果とその考察

調査結果の概要は以下のとおりであるが、比較の有意な差があると思われる項目について考察を行った。

問1. あなたもやがては高齢者となるわけですが、その時一番不安なことは何ですか(2つまで)

1. 健康
2. 遺産などの問題
3. 住宅(老人ホームなどの施設を含む)
4. 介護してもらうこと
5. 家庭との関係(家族への負担)
6. 生活費
7. 精神面(孤独、疎外感)
8. その他

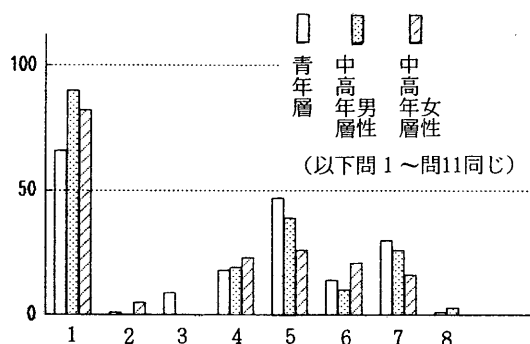


図1 高齢者になっての不安

高齢者になっての一番の不安はどんなことですかという質問に対しては、中高年層の男性では90%が、女性では83%が、さらに青年層(女子学生)の66%が「1.健康」をあげており、三者とも高齢になっても健康でいられるかを心配している。健康について多かったのが、「3.家庭との関係(家族への負担)」で、47%と半数近くもある。高齢者を面倒みる側として回答したのか、自分がみられる側として回答したのかわからないが、中高年層男性39%、女性26%より青年層47%のほうが家族との関係を不安に思っているようである。

不安の順では青年層と中高年層男性は、「1.健康」、「5.家庭との関係」、「7.精神面」となり同じ傾向を示しているのに対し、中高年層女性は「1.」、「5.」の他に、「4.介護してもらうこと」(23%)、「6.生活費」(21%)が他の二者より多くなっている。

問2. あなたは親子同居についてどう思いますか。

1. 親子同居に賛成である
2. 事情の許すかぎり、親子同居がよい
3. お互いの気くばりが必要で親子同居はあまり賛成しない
4. 親子同居には反対である

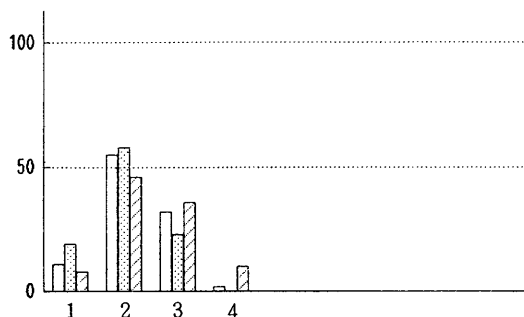


図2 親子同居について

親子同居については、「2.事情が許すかぎり同居がよい」とする者が、青年層、中高年層共に半数近くある。さらに「1.同居は賛成である」と積極的同居を望むのは中高年層男性で19%もあり、「1.」「2.」を合すると、青年層で66%、中高年層男性で77%もある。しかし、中高年層女性では「1.」「2.」合しても54%しかなく、他の二者より少ない。経済企画庁の1985年度「国民生活選好度調査」や、1989年の総務庁「長寿社会における男女別意識の傾向に関する調査」でも同様の調査をしているが、同居希望は55%前後、別居希望は25%前後となっている。これらに対して、本調査の青年層66%、中高年層男性77%という数字はさらに同居指向が高いことを表わしている。中高年層女性では「3.同居にはあまり賛成しない」(36%)「4.同居には反対である」(10%)と同居に否定的な考えが合せて46%もある。これは自分が現在親と同居してそう感じた結果なのか、将来子どもに迷惑をかけたくないと思っているのか、意外な傾向でもある。

問3. あなたは両親の面倒や介護をすることについてどう思いますか。

1. 身近な子どもたちが同居して介護をする
2. 福祉サービス付きの高齢者住宅などに住んで介護してもらう
3. 両親の面倒はときどきみるが、お互いに独立で

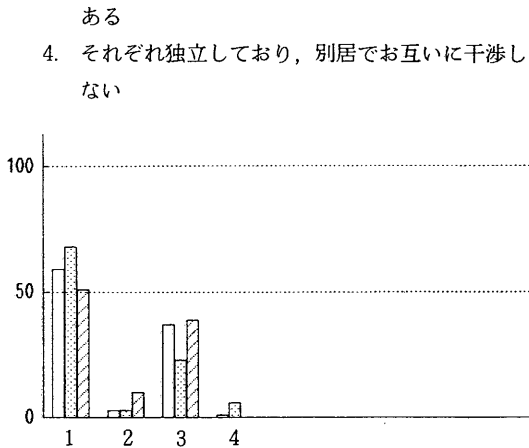


図3 両親の面倒や介護

親の面倒や介護については、問2の親子同居についてどう思うかの質問で、「事情が許すかぎり同居したい」の回答が青年層55%、中高年層男性58%、女性46%という数字になっているが、この問3の質問に対して、青年層の59%、中高年層男性の68%、女性の51%が「1.身近かな子どもが親と同居して介護したい」を選んでおり、似た傾向を示している。青年層（女子学生）の自由回答の中に「親と同居というのは結婚相手の親ではなく、自分の親と同居して、自分の親を介護したい」という内容のものがいくつかあり、青年層の59%が「親と同居して介護」を選んでいるが、これらも自分の親と思って回答しているものが多いと考えられる。

これに対して、「3.両親の面倒はときどきみるが、お互いに独立である」という考えもわりと多く、青年層37%、中高年層男性23%、女性39%あった。

問4. 自分が寝たきりになったとき、身の回りの世話をしてもらいたい人は？

1. 配偶者 2. 息子 3. 娘 4. 嫁
5. 病院・老人ホーム等施設の看護婦さん
6. 訪問看護の保健婦さん
7. その他

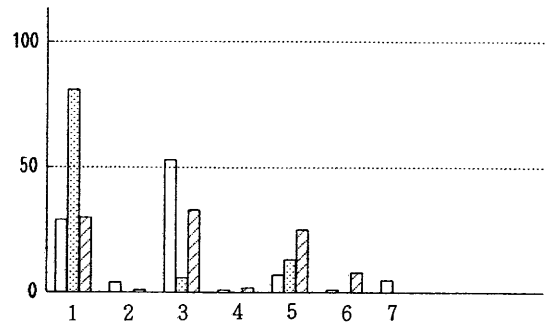


図4 寝たきりになったとき、世話をしてもらいたい人

寝たきりになったとき、身の回りの世話をしてもらいたい人について、青年層、中高年層男性、女性で全く別々の傾向を示している。中高年層男性で最も多かったのが「1.配偶者」（81%）で妻に世話をしてもらいたいと思っているようで、次いで「5.病院等」（13%）となっており、妻以外の息子、娘、嫁などの身内に身の回りの世話をしてもらいたいと考えている人はほとんどいない。中高年層男性（父親）に比べ、中高年層女性（母親）の第1位は「3.娘」（33%）となっている。男性にとって妻は頼るべき存在となっているのに、女性にとって夫はかならずしも頼るべき存在とはなっていないようである。家庭内での役割分担の違いからこのような傾向が出るのかもしれないが、中高年層男女間の差がはっきり出ている。さらに、青年層の53%が「1.娘」に世話をしてもらいたいと考えているようで、自分の親を介護したいと思っていることの裏返しであるともいえる。

しかし、日本の現状は、伝統的に息子（長男）が家の跡をとり、嫁が身の回りの世話をしていることのほうが多くなっている。1988年の厚生省国民生活基礎調査では、寝たきり老人の主たる介護者は子の配偶者（嫁）が一番多く40%にもなっているが、嫁は世話をしてもらいたい人のところでは1%前後しかなく、意識と現実のズレが出ている。青年層（女子学生）、中高年層女性（母親）共、第1位に「娘」を選んでいるところからみると、将来的には娘と親の同居がふえるであろうと思われる。

問5. 痴呆性老人・ボケ老人は、30年後には現在の3倍185万人になると推定されます。あなたの親、または配偶者の親が痴呆性老人になった場合、あなたはどうしますか

1. 自宅で自分が介護する
2. 他の兄弟にまかせる
3. 老人ホームまたは病院に入れる
4. 一人暮らしをさせておく
5. その他

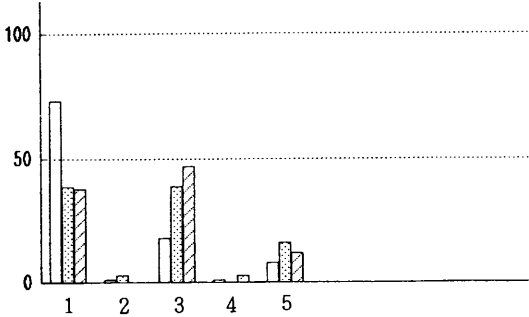


図5. 親が痴呆性老人になった場合、どうするか

親が痴呆性老人になったときどうするかという質問に対して、青年層の73%が「1.自宅で自分が介護する」を選んでいるのに対し、中高年層男女共38～39%しかこれを選んでおらず、青年層と中高年層の大きな差異が出ている。また、「3.老人ホームまたは病院に入れる」を選んでいるのは青年層18%に比べ、中高年層男性39%、女性では47%にもなっている。ここでも青年層と中高年層さらに中高年層男女間で大きな差異が出ている。自分達の現実として近い将来こうなる可能性があり、その時子どもに迷惑をかけたくないと考えている中高年層の意識の表われなのか、青年層が自分の親のことを考えてのことなのか、この問いに対しては青年層、中高年層、親子のおもいやりの中にも意識の違いがはっきり表われているように思われた。

問6. 人間が長生きするにはどんなことが必要ですか。

1. 生活環境が快適であること
2. 病気の克服の技術を進歩させること
3. 若い時から運動を続けておくこと
4. 食生活に留意し、栄養のバランスをとること
5. 自分の好きなことに打ち込むこと
6. その他

人間が長生きするために必要なことについては、青年層、中高年層男女の三者で異った傾向がみられる。中高年層女性では半数の51%が「4.食生活に留意し、栄養の

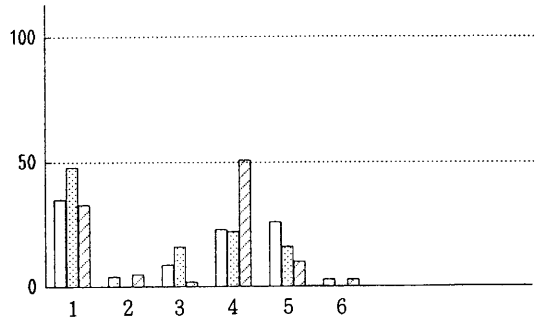


図6 長生きするために必要なこと

バランスをとること」をあげているが、男性の半数48%は「1.生活環境が快適であること」をあげている。家族の食生活を考える役（主婦）である女性と社会で働き食生活は与えられる状況にある男性の、置かれている立場の違いからくる意識の差であるといえよう。さらに青年層は「1.生活環境」（35%）、「5.自分の好きなことに打ち込む」（26%）、「4.食生活のバランス」（23%）と選択肢間で目立って多いものはなく、長生きへの関心が特に高いことを示している。長生きするためには、すべてのバランスが必要であり、どれが欠けても望しくないことは誰もが承知しているが、高齢化問題を考えていくにあたっては“心身共に長生きできるよう”各層への意識づけが必要であろう。

問7. あなたは老後に余力がある場合それをどんなことに生かしていくと思いますか。（2つまで）

1. 自分で何か仕事をする
2. ボランティア活動をする
3. 他人とゲームを楽しむ
4. 自分の趣味に打ち込む
5. その他

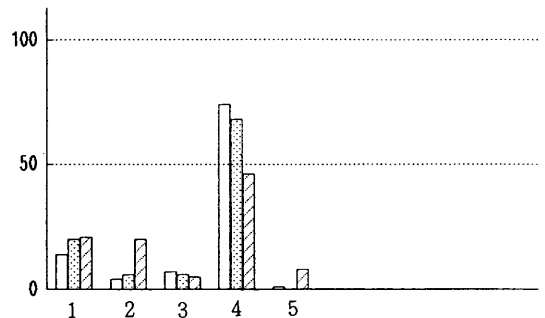


図7 老後の余力をどんなことに生かすか

老後に余力がある場合どんなことに生かしたいかという質問に対して、青年層の74％、中高年層男性68％、女性46％が「4. 自分の趣味に打ち込む」を選んでおり、中高年層女性に比べて、青年層、中高年層男性は特に多い。中高年層女性では、「1. 自分で何か仕事をする」(20％)、「2. ボランティア活動をする」(20％)で合計41％もの人が自分の趣味以外のことをやりたいと考えており、中高年層女性の意欲の高さがうかがえる。長年仕事に打ち込んできた中高年層男性の「4. 自分の趣味に打ち込む」が68％という数字は納得できるが、これから人生を歩もうとする青年層(女子学生)が、「1. 仕事をする」(14％)、「2. ボランティア」(4％)と大変低い数で意識のありかたが気になる。

今後ますます高齢化が進む中で「主婦」と一般的にいわれている中高年層女性の意識が上っているのに比べ、働きざかりの中高年層男性や、これからの高齢化社会の担い手となる青年層の意識が高まっておらず、今後いろいろな面からの広報、教育が必要なのではないだろうか。

問8. あなたは老後の人生設計についてどのように考えていますか。

1. 社会の中で自分の役割を持ち、人びとに役立つ生きかたをしたい
2. これまでやろうとしてできなかったライフ・ワークに取りかかりたい
3. 体はおとろえてきても気持ちだけははつらつとした生き方をしたい。
4. できるだけ家族に頼らずに、自分のことは自分でするようでありたい
5. その他

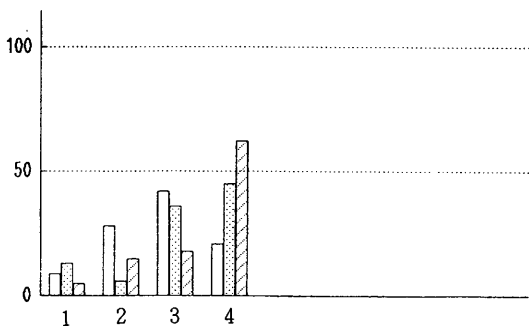


図8 老後の人生設計

老後の人生設計については、青年層と中高年層の男女で違いが出ている。「4. 自分のことは自分でするようでありたい」を中高年層女性の68％が選んでおり、「自立して生きていきたい」という意識の表われだと思われる。これに対し、中高年層男性では「4. 自分のことは自分でする」が45％あるが、「3. 体はおとろえてきても気持ちだけははつらつとした生き方をしたい」が36％あり、女性の「3.」18％に比べ差が出ている。青年層で最も多かったのが「3. はつらつとした生き方」(42％)、これに次いで「2. ライフワークに取りかかりたい」(21％)、「4. 自分のことは自分でする」(21％)となっており中高年層とは異った傾向を示している。

家庭内での男女の役割の違いや、親の保護下にある青年層の置かれている立場の違いからみてやむをえない傾向であると思う。今後、高齢化が進むなかで、自立性や自主性をそこねないで、助け合ってはつらつと生きていくために、各層への幅広い意識づけと教育が必要であろう。

問9. 身の回りの世話が必要な老人をかかえた世帯の人にとってどのような条件や制度が望ましいですか。

(3つまで)

1. 老人介護の休暇がとれる
2. 自分の都合の良い時間帯に勤務時間を選べる
3. 自宅で勤め先の仕事ができる
4. 老人ホーム・医療施設などが充実される
5. ホームヘルパーを派遣してもらえる
6. わからない
7. その他

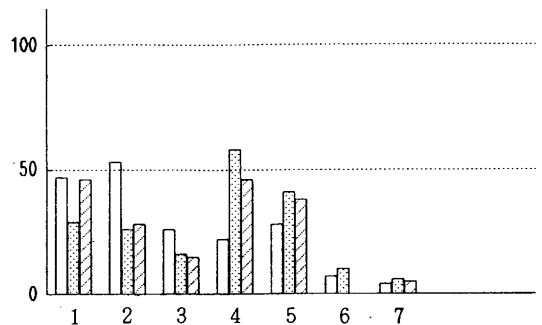


図9 身の回りの世話が必要な老人をかかえた人にとって、望ましい条件・制度

身の回りの世話が必要な老人をかかえた世帯の人にとって望ましい条件は何かとの質問に対し、青年層の53%が「2.自分の都合の良い時間帯に勤務時間を選べる」を、47%が「1.老人介護の休暇がとれる」をあげており、自分が面倒をみる立場になった時のことを考えて回答しているようである。中高年層男性では58%が「4.老人ホーム・医療施設などが充実される」を、41%が「5.ホームヘルパーを派遣してもらえる」をあげており、面倒をみられる立場から身内に世話をかけないで済むような条件・制度の充実を望んでいる。さらに、中高年層女性では「1.介護休暇がとれる」、「4.医療施設の充実」が共に46%、次いで「5.ホームヘルパー派遣」が38%、「1.勤務時間を選べる」が28%となっている。中高年層女性の面倒をみる側と面倒をみられる側の両面を持つ立場から、自分が介護する場合の条件と共に、身内にも世話をかけないで済むような条件・制度の整備を望んでいるようである。

問10. あなたは、今後増えると見られる余暇時間をどのような目的に使いたと思いますか（3つまで）

1. 肉体的に衰えないように体を鍛える
2. 思考力が衰えないよう頭を使う
3. 年をとっても続けられる趣味を持つ
4. 将来の自分の仕事に生かせる職を持つ
5. 自分の生涯をとおして何かをやりとげる
6. 家族とのむすびづきを深める
7. 趣味・スポーツ・文化などで人々と交流する
8. 地域社会や福祉のための活動をする
9. その他

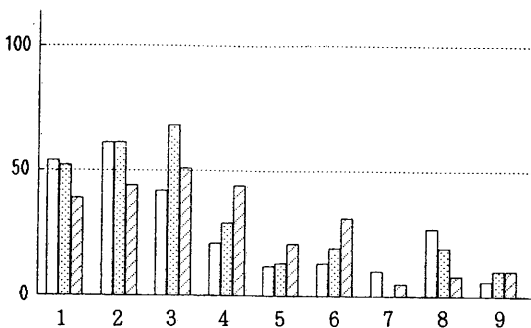


図10 余暇時間をどのような目的に使いたいか

余暇時間の使い方については、「3.年をとっても続けられる趣味を持つ」を青年層が75%、中高年層男女が共

に65%、これを選んでいる。1985年に経済企画庁が1990年に、読売新聞が同様の調査を行っている。これらのデータでは共に「趣味を持つ」をあげている人は55%前後で、今回のこの調査への回答者のほうが高比率を示していることになる。

この質問は3つまで選択させているが、余暇時間の使いかたの第2位、第3位の順は青年層、中高年層男性・女性で異った傾向を示している。

青年層は第1位の趣味に近い比率で71%の人が「7.趣味・スポーツ・文化などで人々と交流する」を選んでいる。中高年層の男女共45%前後の人が「7.人々と交流する」を選んではいるが、男性の58%が「1.肉体的に衰えないように体を鍛える」を、女性の56%が「2.思考力が衰えないよう頭を使う」を選んでおり、体力低下防止とボケないようにしたいという意識がはっきり表われているように思う。

問11. もし、あなたが年をとって一人になり体が不自

由になったとき、あなたはだれに、どこで身の回りの世間をしてもらいたいですか（3つまで）

1. 家族と同居して、家族に世話をしてもらう
2. 家族の近くに住み、家族に世話をしてもらう
3. 老人ホームなどの公的施設に入る
4. 在宅で家庭奉仕員などの公的福祉サービスを受ける
5. 料金を出して家政婦など在宅介護サービスをたのむ
6. 費用がかかっても民間の老人施設などに入る
7. 親しい近所の人や友人に世話をしてもらう
8. わからない
9. その他

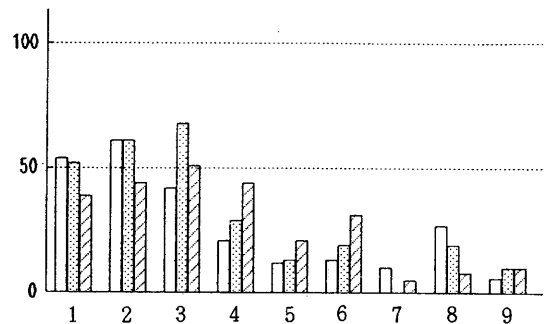


図11 体が不自由になったとき、だれにどこで世話をしてもらいたいか

年をとって身体が不自由になったとき、だれに、どこで世話をしてもらいたいかという問いに対して、中高年層男性は「3.老人ホームなどの公的施設に入る」が68%あるが、「2.家族の近くに住み、家族に世話をしてもらう」が54%あり、公的施設希望と家族介護希望の2つに大きく分れている。これに対し、中高年層女性では、「1.家族と同居して、家族に世話をしてもらう」(39%)、「2.家族の近くに住み、家族に世話をしてもらう」(44%)で男性に比べ家族介護の希望が少ないのが目立つ。さらに中高年層女性は「3.公的施設に入る」(51%)、「4.在宅で公的福祉サービスを受ける」(44%)、「5.民間の老人施設に入る」(31%)など外部介護希望が多い。また、青年層では、中高年層男性と同様の傾向を示し、家庭介護希望が圧倒的に多くなっている。

おわりに

以上の調査結果によって、青年層と中高年層および中高年層男女間に将来の生きかたについて、いくつかの差異があることがわかった。世代間と男女間に意識の差がみられるのは当然であるが、高齢者社会の到来を目の前にしてどのように対応していくかは、各世代の共通の問題として考えていかなければならない課題である。できるならば、すべての人が高齢になっても、自らの生きがい高め、生き生きとした生活を送ることができるように、青年層も、中高年層も自らの生活設計をどのように考え、どう実践していくかについての示唆を得ようとするのが、継続的に研究を展開してきた教育環境アセスメントのねらいである。本研究の結果を手がかりに、さ

らに次の研究を進めていきたいと考えている。

参考文献

1. 金平文二・岩井絹江：女子学生の意識についての調査－教育環境アセスメントに関する研究第1報告 東京家政大学研究紀要, 24, pp.49-69 (1984)
2. 金平文二・岩井絹江：人間成長過程における教育環境阻害要因の探策－教育環境アセスメントに関する研究－第2報告 東京家政大学研究紀要, 25, pp.53-62 (1985)
3. 金平文二・岩井絹江：教育環境を阻害する各種要因の探策－教育環境アセスメントに関する研究－第3報告 東京家政大学研究紀要, 25, pp.61-68 (1985)
4. 金平文二・岩井絹江：教育環境についての意識調査－教育環境アセスメントに関する研究－第4報告 東京家政大学研究紀要, 26, pp.141-147 (1986)
5. 金平文二・岩井絹江：青少年の問題行動についての分析－教育環境アセスメントに関する研究－第5報告 東京家政大学研究紀要, 27, pp.91-96 (1987)
6. 金平文二・岩井絹江：女子青年の意識についての調査－教育環境アセスメントに関する研究－第6報告 東京家政大学研究紀要, 28, pp.29-37 (1988)
7. 金平文二・岩井絹江：女子学生の生き方についての意識調査－教育環境アセスメントに関する研究－第7報告, 29, pp.55-61 (1989)
8. 金平文二・岩井絹江：将来の生き方についての意識調査－教育環境アセスメントに関する研究－第8報告, 30, pp.65-71 (1990)